

防大64期生に対する特別講話を終えて

23期海上代議員

福本 出

防大同窓会事務局からの依頼を受け、4月7日、私は23期生を代表し、この春に入校したばかりの新入生、防衛大学校本科第64期生に対する特別講話のため、久しぶりに母校の正門をくぐった。思えば不安一杯にこの門を通った時から41年の年月が経っていた。あの日はどんな天気だっただろうか。思い出多き小原台の坂道には、春の嵐に桜の花びらが舞っていた。



折しも3月に行われた60期生の卒業式を報じる新聞には、『任官拒否倍増』という文字が躍り、平和安全法制議論にからめた報道ぶりも目立った。同時に、東・南シナ海における中国の強圧的な政策にかかる周辺国との軋轢や、北朝鮮による暴挙が相次いで報道される最中に迎えた防大入校である。防大進学を決意にかかる心の揺らぎは、例年の新入生よりも大きいかも知れない。そのような彼らに、ありきたりな思い出話をしたところで心に響かないだろう。格好つけることはやめよう。なにしろ私自身、自衛隊の幹部を養成する大学とも認識せず、音楽隊に行けるかと思って入学したのだ。そのうえ体力測定も級外、身体検査で見つかった病巣を夏休みに外科切除することが入校許可の条件になり、術後はずっと“体育止め”になるなど、放校寸前のスタートを切った。そんな防大生だった私が、その後もことある毎に迷いに迷いながら、どんな自衛官人生を歩んだのかを、飾らずに話そうと準備した。



23期教務班第2班

本館玄関にお出迎えいただいた香川教務部長の傍らには同期の香月教授もいる。

「入校式まで桜が見られるのは稀なことです」。

教務部長は、そう言いながら応接室に案内してくれた。

副校長や幹事、訓練部長等との懇談の機会に、この春に任官しない学生が多く出た理由をお伺いした。「任官後に各候補生学校に行つてすぐ（あるいは行かずに）辞めるのは、信義にもとる」との國分校長の指導により、迷いを持つ学生との面接を重ねた上で防大卒業の時点で決断させた結果であり、各自衛隊幹部候補生学校入校までに辞めた人数で比較すれば、例年と大きな差はないとの説明であった。概ね推察していたとおりの回答であったことに安堵した次第である。

記念講堂に集合した新1年生約440名は、代表学生の号令のもと一斉に起立した。ネイビーブルーの制服姿も颯爽と、機敏な挙措動作からは、つい1週間ほど前まで高校生であったとは想像もつかない。しかしその一方で、はるか昔、入校式前に筋肉痛がするほど、ひたすら起立と着席の訓練をしたことが脳裏にうかんだ。制服に身を包むと一人前の防大生に見えるが、いまだ自衛隊の部隊を一度も訪問したこともない学生がほとんどである。講話には写真をふんだんに取り入れたスライドを準備して、極力視覚的に紹介するよう努めた。

講話の表題は『勘違い防大生、海将になる』とした。

着校以来、すでに10名以上が辞めたという。

ことある毎に進退を迷い続けた我が半生を紹介し、遅疑逡巡の末にも自衛官として勤めあげることができた先輩がいたことを知ってもらえば、急激な環境の変化にためらう学生が「自分にもやれるかも知れない」と自信を持ってくれるのでは、との願いを込めたつもりである。

私が防大生であった当時の自衛隊は、長沼ナイキ訴訟の第一審で出された自衛隊違憲判決、それを打ち消す二審判決ができるなど、防大同窓会員先輩方の時代と同じく、その存在自体すら否定する冷たい世相が自衛隊に向けられていた。そんな時期に候補生に任官した私が、自衛隊にとどまってやっていこうと思ったきっかけは、江田島にこられた大賀海幕長が柔和な笑顔で語りかけてくれた講話だった。私はそんな記憶をもとに、大賀さんには及ばないまでも、迷っている学生がいたら同じように伝えたいと思った。



大賀海幕長は確か、「自分はいま海幕長としてではなく、オールドセーラーとしてヤングセーラーに語りかけている。自分はなにも特別な人ではなかった。ただ目の前のことを懸命にやってきただけ。気がつけば今の自分がいた。」というようなことを述べられたと思う。雲上人ではなく、こんなにてらいのない方が海自のトップなのだ、ということは意外であり、私は励まされたのだと思う。



私にとって、自衛官人生最後の職は、海上自衛隊幹部学校長だった。海上自衛隊の核心に育ちゆく学生を預かる身となるにあたり、私は海幹校のみならず、防衛大学校創設当時の指導者たちが、敗戦間もない当時、新生日本の軍事組織のリーダー教育にどのような理念を込められたのか、それぞれの創設に尽力された方々の手記を紐解いた。そのような中でも強く印象づけられたのは、初代榎智雄校長と、小泉信三両氏の

言葉だった。

榎校長が、1期生を始めとする草創期の防大生に述べられた珠玉の言葉数々は『防衛の務め』に残されている。中でも“国を守る”ということについて

「防衛の任務は高貴なもので、心魂を投ずるに価するものである」と述べられている。

また、小泉氏による講話は『任重く道遠し』に納められている。小泉氏は、次の4点を繰り返し述べられた。

- 常に真実を語れ
- 物事を他人の身になって考え得る人であれ
- 感謝を知る人であれ
- 己の非を認める勇気を持て

国家存亡の危機に瀕した日本が焼土からの再起を期するとき、その国を守る新たな武力組織のリーダーに求められたのが、この4つであったことを知るとき、非常に深く重たい



ものを感じる。すなわち、もし旧軍のリーダーたちがこの4つの徳目を備えなかったとの反省に立ってのことだ考えれば、である。

これらの著書は、自分が防大生のときも読んだ記憶がある。しかし、その時の自分には両氏の教えを受けとめる器がなかった。そして今、防大新入生に相對するとき、防大創設時の理念をかみ砕いて紹介してあげたかったのだ。

目があった幾人かの学生の表情からは、なにがしかのものが届いたのではないかと感じられた。

講話終了後、資料館に案内していただいた。

そこには榎記念室があり、まさに先刻1年生たちに紹介した榎校長や小泉氏の言葉がしるされていた。

「私立大学では、創業者の理念が残り今も大事にされている例を見ることがあるが、国立大学で見るとは希だ。防衛大には創設時の理念が生き続けているのですね」。資料館を見学された部外講師の一人がそのように述べられたと、教務部長から伺った。

我が同期も、陸幕長と海幕長を残すのみとなり、ほとんどの者は制服人生を全うして、第二の人生を歩み始めている。制服を脱いで間もない今、防大に入ったばかりの彼らが一段とまぶしく見える。彼らが歩む自衛官としての道は、冷戦及びポスト冷戦期に自衛官であった私たちOBが歩んだそれよりも厳しいものであるかも知れない。

「頼むぞ」という気持ちを胸に、桜と鳩の校章輝く校舎を後にした。